

P1-015

学童期にある慢性疾患患児の学校生活に関する看護師の関わり

吉野 妙子、吉川 一枝

亀田医療大学 看護学部 看護学科

【目的】

学童期にある慢性疾患患児（以下患児とする）の多くは、通常の学級で治療管理をしながら学校生活を送っている。その学校生活がQOLの高い生活となるためには、家族や学校関係者、医療者などの患児を取り巻く大人の支援が必要となるが、看護師の関わりの詳細は明らかにされていない。そこで、本研究は、学童期にある患児が入院および外来を受診した際に、小児病棟および小児科外来の看護師が、患児がQOLの高い学校生活を送るためにどのように関わっているか明らかにすることを目的とした。

【方法】

関東圏内にある総合病院1施設の患児に関わりがある小児病棟・小児科外来看護師に半構成的面接を実施した。同意を得て録音した内容から逐語録を作成し、相違性や共通性を判断しカテゴリを形成した。本研究は、亀田医療大学研究倫理審査委員会および看護師が所属する施設の倫理委員会の承認を受けて実施した。

【結果】

面接を実施した看護師は、病棟看護師2名、外来看護師2名であった。経験年数は、10～16年であった。分析の結果、病棟・外来看護師ともに、患児の学校生活への関わりは、【患児の学校生活を知る】【患児に説明し同意を得る】【家庭、学校、病院の連携のために調整する】【患児への関わり不足を実感する】の4カテゴリが抽出された。病棟看護師は、患児の学校生活を知るために、学校での友人関係、学習、治療の困りごとについて情報収集を行い、そのために工夫をしていた。家庭、学校、病院の連携のための調整については、外来看護師と調整をしており、学校との連絡調整は医師が実施していると認識していた。外来看護師は、患児の学校生活を知るために、学校での困りごとや症状への対処、学校の受け入れ状況を確認していた。家庭、学校、病院の連携のための調整については、医療者間の調整の他、教師と医師との橋渡しや家族に学校との調整を促す関わりを実施していた。しかし、両看護師ともに患児への関わり不足を感じていた。

【考察】

病棟・外来看護師の患児への関わりは、サブカテゴリは違うが同様のカテゴリが抽出された。しかし、両看護師ともに学校生活支援に関する意識は高いとはいえないことが明らかになった。患児がQOLの高い学校生活を送るためには、看護職の意識を高め、学校や家庭との連携・継続した支援が必要と考える。また、看護職が医療現場における学校生活に関する調整役となる必要性が示唆された。

P1-016

肢体不自由児における社会適応能力評価の妥当性の検討

菊地 謙、新田 收

首都大学東京大学院 人間健康科学研究科

【目的】

障がい児の幼児期から成人期までの心理的、社会的問題行動には、早期介入が必要であると言われている。しかし、肢体不自由児を対象とした社会適応に関する研究は少なく、本邦においては肢体不自由児を対象とした、適切な社会適応評価に関する研究はこれまでなされていない。そこで本研究では、肢体不自由児の社会適応能力評価の妥当性を検討することを目的とした。

【方法】

対象は、肢体不自由児26名（男児：11名、女児：15名、平均年齢：11.65±2.15歳）とした。対象児の社会適応能力の評価には、アンケート式で採点するASA旭出式社会適応スキル検査（以下、ASA）を使用し、構造化面接で採点を行うVineland-2適応行動尺度（以下、Vineland）を外制的基準として、肢体不自由児におけるASAの基準関連妥当性を検討した。ASAは、4つの下位項目スキル（言語、日常生活、社会生活、対人関係）から構成され、Vinelandは、3つの適応行動領域（コミュニケーション、日常生活スキル、社会性）を使用した。統計は、ASAで算出された得点に対して、Vinelandの標準化された適応総合得点をPearsonの積率相関係数を使用して相関を求め、肢体不自由児におけるASAの基準関連妥当性を検証した。解析にはIBM SPSS Statistics 24を用い、有意水準を5%とした。本研究は、首都大学東京荒川キャンパス研究安全倫理審査委員会（承認番号：17111）の承認を得たうえで実施した。

【結果】

対象の疾患は、脳性麻痺児20名、神経筋疾患4名、脊椎疾患2名であった。Vinelandの適応総合得点とASAの総得点の相関は.81であり、高い一貫性が見られた。また、比較的どの下位項目も高い相関関係を示していた。Vinelandの「コミュニケーション」はASAの「言語スキル」および「社会生活スキル」と、Vinelandの「社会性」はASAの「社会生活スキル」および「対人関係スキル」と、相対的に最も強い相関を示したが、Vinelandの「日常生活スキル」はASAの「日常生活スキル」よりも「社会生活スキル」とより強い関連を示した。

【考察】

本研究では、これまで国際的に広く使用されているVinelandの面接版をもとにASAの妥当性を検証した。その結果、中から高等度の相関係数を示し、ASAの検査内容の特徴が現れた結果となっていること、相対的な社会適応能力を評価することができることから、脳性麻痺児を含めた肢体不自由児の社会適応を評価するうえで、十分な妥当性があると考えられた。